Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-14

少年少女の＜怒り＞と＜復讐＞について ： 目取真俊『虹の鳥』論

劉, 妍

(Citation)
海港都市研究,16:29-39

(Issue Date)
2021-03-25

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012830

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012830

KOBE UNIVERSITY

少年少女の＜怒り＞と＜復讐＞について

―目取真俊『虹の鳥』論―

劉　妍

(Liu, Yan)

1. はじめに

行動する作家目取真俊（1960－）は作家活動とともに、沖縄の反基地運動の最前線でも戦っている。彼は十数年前から米軍普天間基地の辺野古移設に反対する運動に参加し、座り込みやカヌーなどを用いた、非暴力的抗議行動を行いつづけているのである。目取真の作品は社会問題を取り扱ったものが多く、特に沖縄戦や戦争の記憶の共有や基地問題などに強い関心を持っている。近年では、小説よりもエッセイや評論に健筆をふるっているが、沖縄の置かれている現状に直面する姿勢は作家デビュー当初から変わらず一貫している。

戦争の残した傷跡は、目取真が繰り返し取り上げているテーマの一つである。彼の作品の中で特に「希望」(『朝日新聞』夕刊、1999 年 6 月 26 日)、『虹の鳥』(『小説トリッパー』2004 年冬季号、朝日新聞社、2004 年)及び『眼の奥の森』(影書房、2009 年)は戦後沖縄に潜在する暴力を剥き出しに描いており、注目に値する。この三作は 1995 年 9 月 4 日に発生した米兵による少女暴行事件を背景としたものである。この事件をきっかけに、沖縄県民の間で反基地運動が発生し、日米安全保障条約の改正や普天間飛行場の移設などをめぐって抗議活動が広がり、同年 10 月 21 日には、宜野湾市で暴行事件に抗議する県民総決起大会が行われ、約八万五千人もの県民が参加した。しかし、2004 年に米軍ヘリが沖縄国際大学に墜落し、キャンパスが米軍に占拠される事件や、2016 年二十歳の日本人女性が米兵に強姦・殺害されるなど、相次ぐ暴力事件は戦後沖縄の現状を象徴している。目取真俊が『沖縄「戦後」ゼロ年』（日本放送出版協会、2005 年 7 月）で述べたように、基地問題を解決しない限り、戦後は永遠に「ゼロ」のままである。このように表面化された戦後沖縄の問題を目取真は『虹の鳥』に凝縮し、それを暴力という極端な形で示している。

『虹の鳥』は、軍隊のように厳格に統制された暴力組織の迫害を受けて「廃人」となった若者の苦しみを描いている。性的暴力、リンチ、経済的搾取などの暴力が満ちているこの作品では、国家権力や暴力に対する沖縄市民の無力さが暴かれている。それと同時に、声の奪われていた者の強い怒りも記されている。

沖縄の少女の売春行為を現代の基地問題と結びつけて論じるのは『虹の鳥』の特徴の一つである。描かれている暴力は単なる個別な事件ではなく、米軍に占領されている男性優

位の沖縄における女性の悲劇的な運命が映し出されている。目取真は「水滴」(1997 年)、「魂込め」(1998 年)、「面影と連れて」(1999 年)「群蝶の木」(2000 年) などの作品で戦争トラウマに苦しんでいる人々を描いているが、戦争のもたらした傷を、あとを絶たない暴行事件と絡めたのが『虹の鳥』の独特なところである。つまり、この作品は物語としての創造性を持ちながら、ルポルタージュの要素も備えている。本論文は、沖縄に潜在する暴力をいかに可視化するのか、暴力に対抗するものは何かを分析する。その上で、復讐として行われた惨殺行為と、怒りの矛先として向けられた白人少女の殺害を描くことの意味について考察する。

2. 暴力の可視化

2.1 「癒しの島」のもう一つの顔

『虹の鳥』の主人公は生きる希望を失った者である。カツヤは二二歳で、中学一年生の時から約十年間、比嘉の率いる非行グループから暴行を受けていた。十七歳の少女マユは比嘉のグループに売春を強要されている。カツヤの仕事は彼女を客のもとへ連れて行き写真を撮り、売春で得たお金と脅迫するために使われる写真を比嘉に渡すことである。目取真の他の作品と同様に、被害者の女性は声を奪われている。例えば、マユは比嘉から薬を飲まされ、常に意識不明の状態にある。密室に閉じ込められた別の少女らも抵抗する姿勢を見せながらも、結局比嘉と松田のリンチによって屈服せざるを得なくなっている。彼女らの置かれている状況や心境に関する描写が少ないかわりに、彼女らに加えられた暴力が執拗にして詳細に描かれている。

この点について、谷口基は、カツヤとマユは「＜暴力＞によって形成されたヒエラルキーの最下層に置かれ」ており、＜沖縄＞そのものを象徴しているとし、暴力に覆われた沖縄の「不可視の＜暴力＞を可視とするために、象徴を具象とするために、「虹の鳥」の暴力描写はある」と指摘している[2006 : 195]。確かに谷口の言う通り、このような暴力描写はかつて沖縄におきた様々な事件とそれによる被害を想起させるものとして機能しているが、目取真は暴力のほかには、沖縄の生活空間の細部描写にまで様々な工夫を施している点にも注意を払う必要がある。つまり、「国道五八号線」、「平和通り」、米軍基地「普天間」「嘉手納」といった地域的・文化的景観や「ステーキ・ハウス」、「マクドナルド」、「米軍払い下げ用品店」等によって沖縄の日常生活に充満している権力構造が示されている。以下、「国道五八号線」に焦点を当ててみていきたい。

小説の世界はカツヤがマユとその客を乗せた車を追うシーンから始まる。青年が見た沖

縄の風景は以下の通りである。

国道五八号線を南下して、奥武山公園の入り口に近いレストランの前で信号待ちをしているとき、対向車線を迷彩色をほどこした米軍の大型トレーラーが二台通り過ぎた。下腹に響くタイヤの音と同時に、吹きつけられた排気ガスがエアコンの通風口を通って車内に入り込む。車内循環にしてあるのにボロ車が、と舌打ちし、カツヤは右手にある那覇軍港を見た。金網の向こうに広がる敷地に、迷彩色のジープや装甲車が十数台並んでいる。ほとんど遊休化していて、普段は閑散としている軍港にしては珍しい光景だった。(P7)

「国道五八号線」はこの小説における重要なシンボルである。小説のストーリーがこの道路に沿って展開されている。国道五八号線は那覇市から北部まで、沖縄本島の西側を走るメインストリートであり、那覇港、普天間飛行場、嘉手納飛行場などを結ぶ沖縄の大動脈で、緊急時の滑走路として使用されることを目的に建設されたものである。道路の両側はリゾートホテルが立ち並び、美しいヤシの木と青い海に囲まれていることから、現在度々旅行パンフレットに取り上げられ、今では南国ムードを味わえるドライブの名場所となっている。だが、このような美しい景観を眺めることはカツヤにとっては苦痛でしかない。彼は比嘉への上納金に困ると、いつも母親から借金するが、国道五八号線を通って行くことになっている。そのたびに、金網に囲まれた米軍基地の風景が目の前に現れてくる。カツヤは強い苛立ちを感じ、次のように思う。

もし戦争がなく、米軍基地として強制接収されることがなければ、カツヤたちも金網の向こうの土地に生まれ育ったはずだった。そうだったら、今とはまったく違った人生を生きていたはずなのに……。カツヤの人生だけでなく、両親や祖父母、戦後の沖縄を生きた村の人々、全ての生き方が変わっていたはずだった。(P184)

カツヤの感じる、逃げられない恐怖や不安とは対照的に、アメリカ人家族は芝生の上でバーベキューをしていた。つまり、貧しい沖縄の若者とのんびりした基地生活を送っているアメリカ人との間で鮮明な対照を見せている。

カツヤの移動に伴い、国道五八号線沿線の地名が登場する。奥武山、小禄、宜野湾、国頭、真栄原、読谷、恩納、嘉手納、三叉路など、米軍の基地や、抗議運動が行われている

場所ばかりである。ここからも沖縄の人々の日常生活に浸透されている緊張感や抑圧を感じ取ることができよう。比嘉を乗せた車が国道五八号線を走っている際、比嘉は「本気で米軍を叩き出そう」とするなら、「吊るしてやればいいんだよ。米兵の子供をさらって、裸にして、五八号線のヤシの木に針金で吊るしてやればいい」という暴言を吐く。この言葉は実行には至らなかったが、張りつめた雰囲気を視覚化し、「東洋のハワイ」、「平和な癒しの島」などで隠されてきた沖縄の実情を暴いている。かつて目取真は基地問題をめぐって、稲嶺恵一知事のいわゆる「ベスト・ベター」の選択に反論し、「最悪の選択」を提示している（「いま語る　沖縄と私　「最悪の選択」を考える　編み出したい独自の文章」『琉球新報』1999 年 8 月 30 日）が、『虹の鳥』や「希望」で描かれた白人幼児を殺害するようなテロ行為は、むしろ社会を変革するには暴力だけでは足りないことを示唆しているものと思われる。なぜなら、自分らに施された暴力と周囲の無関心に対して、少年少女の取った「最悪の選択」としての反抗は徒労なものでしかなかったからである。カツヤとマユが逃亡の道として選んだ国道五八号線の行く果ては鹿児島県で、いくら逃亡してもなお沖縄を支配する米軍、日本本土からは逃れられない、と示唆している。

2.2 「虹の鳥」の表象

カツヤとマユは、地縁血縁のない孤独な少年少女であるため、比嘉らの暴徒の標的とされている。マユに比べると、カツヤは裕福な家庭に生まれ、父親は不動産業を営む一流資本家の長男であり、母親久代は、普天間基地の近くにある三叉路で喫茶店を経営している。父親宗進は軍事用地として多額の軍用地料を得ている。しかし、カツヤはこれを強く憎んでいる。父親は若いころ「コザ暴動」に参加したことがあるが、真の理由は「反対運動が盛り上がらないと、軍用地料も上がらないし、政府の補助金も増えない」からだった。また、二人の兄が自立せず、軍用地の賃貸料で暮らしている。つまり、高校卒業後に沖縄を脱出して本土の大学に入学し、自立した姉の仁美を除いて、家族は基地に依存して生活しているのである。歪んでいる基地経済は、若者の就職問題を引き起こすだけでなく、その悪影響は若者の自立精神をも蝕んでいく。

カツヤが三叉路の歩道橋で米兵のレイプ事件に抗議するデモ隊を見下ろすと、向かい側の普天間基地が見えてくる。同時に、彼はマユと仁美のことを思い出す。子供の頃、仁美が米兵にレイプされたところを目の前にしながらも、彼はなすべくはなかった。現実では今でも何もできないまま、彼はただ虚しく、「体にねじ込まれた石の痛み」を感じるだけである。

「彼の体にねじ込まれた石」とは、マユが中学の時レイプされた際、陰部に石が投入されたことを示唆している。性器に異物を押し込まれるのはカツヤ自身も経験したもので、比嘉にマッチを性器に突きつけられて暴行を受けたことがある。この記述から分かるように、性的暴力で受けた傷はトラウマとなり、その苦しみは体の中で繰り返されているのである。さらに、性暴力の対象として、男女の差がないことにも注意する必要がある。男女を問わずということから、沖縄全体が背負う暴力を浮き彫りにしていると言えるだろう。

カツヤは米軍や比嘉の残虐行為に対して強い「身体的不快感」を感じているが、度重なる暴力に対して彼ができることは「何も考えない」、「何も考えるな」ということだけだった。次の引用は、彼の米軍に対する強い怒りと無力感の現れである。

> 弟と一緒に遊んでいたあの少女が沖縄の男に暴行されたら、あいつらはどれだけ騒ぐだろうか、と思った。米兵に沖縄の少女がやられたんなら、同じようにやり返したらいい。そう考えて実行する奴が五十年の間一人もいなかったのか。襲う奴と襲われる奴が決まっている、そういう島なのだ……。 別の声が心に走る。自分は何もできないくせに、何言ってるか。親の金にすがり、比嘉の言うがままに動き、いかれた女の世話をするしか能のない臆病者のお前が…… 。(P106)

無論、「五十年」とは、1945 年に米軍が沖縄を「占領」して以来のことで、「襲う奴と襲われる奴」が共存している沖縄の状況を示している。端的に言えば、この小説は弱者が自分よりも弱い者を求めて暴力を振るうという、暴力の反逆を描いたものとして理解できよう。この点は少女たちの「復讐」にも表れている。比嘉らに監禁された「小柄な少女」は性交を強いられた末、比嘉らの圧力によるものだとはいえ、彼女自身からも進んでマユを蹂躙してしまうことになる。マユもまた暴力をもって暴力に抗い、「小柄な少女」を殺害し、しまいには彼女の女性器にカラオケのマイクを突き刺したのである。つまり、単なる強弱の関係性だけでなく、ここにも暴力の連鎖性が示されている。これに対して谷口は「日本とアメリカという二つの国家によって苛まれる沖縄という構図にダイレクトに重ねられるためには、「虹の鳥」の暴力描写は不可欠なものなのだ」と解釈している。このように、比嘉―カツヤ―マユの関係をそのまま「アメリカ-日本-沖縄」の喩えとして理解してもよいのだが、しかしその一方、このような読みでは、沖縄の複雑な社会状況を見逃してしまう恐れもある。

暴力組織の力が、抵抗しない従順なカツヤを生み出した。彼の無力さは暴行者の比嘉に

対する依存でもある。学校の先生や警察の手にも負えない比嘉のグループは暴力団に属し、そのいじめは卑劣で、陰には沖縄の闇社会の影が潜んでいる。カツヤは比嘉の暴力集団の支配から逃れることはできない。なぜなら、彼は経済的に自立することは難しく、生きる能力と手段がないからである。生き残るためにはカツヤは比嘉に頼るしかない。もう一方、大きな問題はディスコミュニケーションの問題である。その問題は教師と生徒の間、親子の間、夫婦の間に存在し、若者たちは家族からも先生からもその苦しみを理解してもらえないのである。人間関係は結局、権力と金銭のみで結ばれており、頼りのないカツヤにとって、唯一の慰めは架空の虹の鳥である。

マユの背中には赤、黄、青、緑、紫の虹色をした鳥が彫られており、彼女が弱くなればなるほど、虹の鳥のカラーは鮮明になっていく。その刺青は度々カツヤの脳裏に浮かび、暴力に遭うたびに、絶望の中で虹の鳥のイメージがよみがえってくる。カツヤにとって、虹の鳥は希望の象徴である。彼はかつて社会科の教師から、沖縄北部の原生林にいる虹の鳥の話を聞かされた。その鳥を見たものは、ベトナムでは死なずに戦場から戻ってくるという。無論実際に、虹の鳥の存在を確認することはできないが、ベトナム戦争で生き残った米兵のように、カツヤは虹の鳥に生きる希望を追い求めた。しかし、カツヤも社会科の教師も見落としているのは、ベトナム戦争から生還してきた兵士を待ち構えているのは必ずしも希望ばかりの世界とは限らない点である。作中でカツヤが見ている映画に登場する兵士たちの抱えている PTSD などの病が示しているように、虹の鳥を見たとしても、暴力（戦争）によって心身の受けた苦痛は払拭できないものである。小説の最後で、虹の鳥を目指して、北部の「やんばる」へ走ったカツヤはそこで虹の鳥の幻影を見る。

> 夜の森の奥に裸のマユが立っている。露に濡れた木々や草の葉、腐葉土、森に棲む生き物たち、それら全ての発する匂いが森の冷気に清められ、マユを包む。白い体がしっとり濡れている。固い種子が割れ、新芽が吹くように火傷が消えて、新しい皮膚が現れる。青や緑の羽毛に縁取られた緋色の顔。金色の虹彩と漆黒の瞳が夜の森を見る。鋭い嘴が開き、鳥の鳴き声がこだまする。樹間に差し込む月の光がマユの体を照らし出し、ゆっくりと上げられる左右の手の動きに合わせて、肩胛骨の上の翼が羽ばたきを始める。羽音がしだいに大きくなり、マユの背中を離れた鳥は、七色の光を話ちながら夜の森を舞う。(p219)

虹の鳥に象徴される、少女の体の内側から噴き出す力によって、比嘉らの暴力に支配さ

れた現状から引きずり出される。要するに、憂鬱な絶望に包まれていたカツヤは、小説の最後で、分裂していた自我が虹の鳥のイメージによって蘇り、自己統合されることとなる。

なおここで注意しなければならないのは、虹の鳥は希望とともに、現実の象徴でもあるということである。マユの体に刻まれた虹の鳥の口周りがタバコで焼かれている。「厚い釘が打ち込まれていた」虹の鳥をみて、カツヤは自分とマユ、さらに沖縄の現状を思い起こされる。次の一節はその部分である。

> 丸く盛り上がった火傷の痕を、虹の鳥に撃ち込まれた太い釘のようだと思った前夜の記憶がよみがえる。自分にも、マユにも、太い釘が撃ち込まれている。それを抜く力はなかった。（P169）

引用文からも分かるように、虹の鳥のイメージは、無視され、犠牲になった人たちの存在を思い出させる。カツヤの言葉のように、「米兵に暴行された少女のために数万人が集まっても、ベッドでうつ伏せになっているマユのことを気にする者はいなかった」（p192）。『虹の鳥』は米軍基地と一緒に生きなければならない、沖縄の若者たちのよりどころのない混沌とした生活状況を描いている。佐藤泉の指摘によれば、レイプされた少女もマユも被害者だが、八万人以上が抗議に集まったにもかかわらず、彼女たちのような最下層の人々の窮状は依然として無視されているのである［2008］。つまり、幻の虹の鳥にすべての希望を託すしかない若者たちの孤独な生存状況を示している。また、大規模な県議会とマユのような被害者への無関心は沖縄内部の分裂も示されている。栗山雄佑は米兵暴行事件を女性の人権問題として捉える女性と反基地運動として捉える男性の認識との間にはズレが存在していると指摘する［2017］。謝花直美も同様な意見を示し、「人権侵害という視点では女と男の間に「温度差」がある」と説いた［1996］。

タイトルの「虹の鳥」は、苦境から逃れた、解放への希望の象徴であるが、その希望は結局消えてしまう。空想の中で、虹の鳥とともに「森の闇よりさらに深い影」が近寄ってきて、「喉にアーミーナイフが当てられる」。つまり、虹の鳥の幻想はいずれ崩れてしまうということであり、読者に改めて沖縄の厳しい現実を意識させる。

3. 暴力に対抗するもの

近年、上間陽子『裸足で逃げる 沖縄の夜の街の少女たち』（太田出版、2017 年）、打越正行『ヤンキーと地元―解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』（筑摩

書房、2019 年）等、沖縄の若者の生活状況を取材したドキュメンタリーが数多く出版されている。沖縄の高校中退者や中学卒業者を含む若者の現状を、社会学者が地道に調査したところ、日常的に暴力が起きていることが明らかになった。彼らの暮らしぶりから、「平和の島」の下に隠された沖縄の本当の姿を発見することができる。文部科学省が 2018 年 10 月に発表した「2017 年度中途退学者に対する指導状況調査結果」によると、沖縄県では 1000 人当たりの不登校者数は 27.6 人（不登校の生徒数 1284 人）で、滋賀県（28.5 人）に次いで二番目に多く、中退率は 2%（中退者数 1116 人）で最も高い。さらに、十人に一人が教師やクラスメートへ、或いは器物損害といった暴力を振っている。

青少年の非行や中途退学に続き、若者の貧困問題も注目されている。沖縄県が 2018 年に行った調査では、「どのような対策に力を入れるべきか」という質問に対し、県民の 42.1% が「子どもの貧困対策の推進」と答え、その次にある「米軍基地問題の解決の促進」は 26.2% となっている（前回 2015 年に行われた調査では 37.8%となっている）。

前述した少女強姦事件の発生した 1995 年、目取真は沖縄市の高校教師を勤めていた。教育の第一線で働きながら、彼は深刻な教育問題を目の当たりにしたはずである。そこで、目取真は女生徒が米兵に襲われ妊娠し、こっそり堕胎して退学するしかないという厳しい現実を突き付けられた。彼は「性暴力の事件で表に出るのはほんの一部」で、「実際には公表される数字の何倍もの事件が起こっている」ことを指摘する［2005：110］。『虹の鳥』は、声を奪われ、無視され、犠牲にされた沖縄の若者の現状を、学校を辞めざるをえなかったマユとカツヤを通して可視化した。

銘苅純一は『虹の鳥』の初出と初版本の相違について考察し、書き直した部分は 469 箇所にも及ぶと指摘する。その中で、デモ隊のスピーカーから流れる女性グループの音楽が初版本で「民謡」だったのに、「琉球民謡」に書き換えられていることに注目している。そして、その理由について、安室奈美恵、ティンクティンクなどいった 1995 年以来大ヒットした沖縄の女性歌手の存在がほのめかされていると論じる［2012：112］。このように、少女たちは沖縄のイメージアップに利用され、「政治的沖縄」から、「癒しの島」へ転換させる意図がうかがえる。『虹の鳥』の中で、最も苛酷な現実に反抗しているのは仁美であるが、彼女の造形は初出と初版の間で大きな違いがある。初版本では彼女が米兵に強姦される場面が加わっている。仁美は独立心の強い性格とされているが、実は精神的に深い傷を負っている。この加筆によって、仁美、マユ、そして 1995 年の強姦事件の少女の間の類似性が見いだされる。つまり、レイプされた少女、仁美、マユ、そして人気のある女性歌手、彼女たちは消費された性的対象にすぎないのだ。

沖縄のイメージは1960年代の暗い、「政治的」な沖縄から、1980年代の沖縄返還運動とともに、明るい文化的な沖縄へと変化した。沖縄を日本の内部に収めるのではなく、独自の文化、主体性を探そうという動きが現れ、新しい世代の人々が、沖縄の方言や伝統文化の再発見に努めるようになる。注目すべきなのは、ポップカルチャーなどの＜文化の力＞によって、権力の構造が隠蔽されているということである。例えば、『産経新聞』に掲載された本土出身の主婦の投稿がそのことを物語っている。「沖縄の人たちが多額の補助金をもらいながら、なぜ感謝の気持ちの一片もなく不満ばかりを言い募っているのか」（「読者から」1997年4月28日）。この疑問は『虹の鳥』でも久代の言葉を借りて述べられている。デモ隊の進行をテレビ中継で見て、彼女は次のような言葉を口にする。

> 「子どもに手を出すアメリカーも悪いとは思うけどね、でもあれだね、夜から小学生を一人で買い物に行かせる親も悪いんじゃないかね。基地のそばで何十年も生活してきて、それくらいのこともわらないのかね。」（中略）「小学生に手を出すアメリカーが悪いことくらい、うちらみたいな者でも分かるさ。でも、普段はアメリカー相手の商売をして、軍用地料をもらって、基地のおかげで喰ってる者たちまで、騒ぐのはうちには理解できんさ」（P173）

久代のように、少女の被害を無感情に眺める姿勢は、「希望」の冒頭部と重なっている。「コザの市街地からさほど離れていない森の中で、行方不明になっていた米兵の幼児が死体で発見された」、「遺体には首を絞められた跡があり」というテレビニュースを見て、食堂にいる人々は冷酷な反応を見せている。映っている知り合いの人にしか関心のない女、これで観光客が少なくなるのではないか、と心配するタクシーの運転手、彼らの無関心な態度は、まさに久代の言葉「いくら集会しても、何も変わらんさ」と呼応している。「お行儀のいいデモ」をしても、結局「お茶を濁すだけ」であり、「八万余の人が集まりながら何一つできなかった茶番」となってしまう。この結論に言った主人公は次のように決意する。「今オキナワに必要なのは、数千人のデモでもなければ、数万人の集会でもなく、一人のアメリカ人の幼児の死なのだ」。まさに暴力によって暴力を制する「最悪の選択」が現れてくる。

暴力に対してカツヤが無抵抗なのに対して、苛酷な現実に反抗しているのは仁美とマユである。特に、か弱いマユには「最悪の選択」しか残されていないのである。作中、マユによる暴力は四回も描かれている。一つ目は性交渉をする高校教師にふるった暴力で、二

つ目は比嘉・松田グループを撲殺することで、三つ目は逃亡途中カツヤにカッターナイフで襲いかかる場面で、四つ目は白人少女を惨殺することである。前述で引用した比嘉の言葉「吊るしてやればいいんだよ」は、小説の最後でマユの怒りの爆発によって実現される。この結果は、『虹の鳥』の帯に書かれている言葉にすでに示されている。「基地の島に連なる憎しみと暴力。それはいつか奴らに向かうだろう。幻の虹の鳥を求め夜の森へ疾走する二人。ヤンバルの闇に解放の地はあるのか――救いなき現実を描く衝撃の長篇」。「奴ら」は言うまでもなくアメリカ人を指している。この幼児殺害に対して尾西康充は以下のように分析している。

> あえてショッキングな殺害を取り込んだのは、米軍基地が沖縄社会にもたらしている暴力の現実を明確にしようとしたことにある。アメリカ人に、日本人に向けてそれを訴えようとしただけではなく、何よりも沖縄人自身に――米軍基地に依存し、日本政府に依存し、沖縄の保守系指導者層に依存している――を打破することに向けられていたのではないか。アメリカ人少女を殺害することは、もはや内外の権威に依存する《二重の隷属》に後戻りを許さない状態におちいらせるための企みであったと考えられるのである［2018：31］。

尾西の指摘した通り、幼児殺害という行為は現実に目を背けている沖縄の人々を覚醒させ、アメリカや日本政府に依存する生活に「後戻り」させないための手段といえよう。この事件は突如発生し、マユが犯行にいたるまでの原因、その心理、結果などは一切不明のまま起きている。よって、この事件は動機や感情等を排除した、単なる一つ象徴的な出来事として受け止められる。小説でしか描けない殺人行為は、単なるマユの復讐ではなく、変えられない現実に対する怒りであり、無力感、絶望に対する暴力による抵抗でもある。

4. おわりに

目取真の作品は声の奪われたものに寄り添い、その語れなかった言葉や、沈黙の奥にある言葉に耳をすます努力がされている。マユや『眼の奥の森』の小夜子の受けた暴行は、いずれも他人の口を借りて語られる。被害者の「沈黙」は、主体性の失われた沖縄の置かれている状況と一致している。

2018 年 9 月末の沖縄県知事選では、米軍普天間飛行場（同県宜野湾市）の名護市辺野古への移設反対を訴えた玉城デニー氏が初当選した。沖縄の民意は示されたが、政府は移設

を進める姿勢を崩さない。政府と反対する市民が対峙する構図が続く中、沖縄の「声」は政府と国民の両方から無視されている。この無関心な沈黙は、政治的無関心や経済的利益、地域的な差別といった政治的暴力に由来する。2020 年でアメリカ兵が起こした交通事故をきっかけに起きた“コザ暴動”から五十年の歳月が立つが、変わらぬ米軍被害に市民は怒りの声を上げ続けている。仁美の言葉「世の中変わるよ」、「自分の力で生きなさいよ」はカツヤに向けるものであり、絶望の中でも希望を持ち続けていくことのメッセージでもある。

暴力という極端な手法で不条理に対する怒りを表現したのは、目取真の詩学である。それと同時に、沖縄の現状を表すのに効果的だと思われる。『虹の鳥』について議論する際、他の関連作品を考慮しなければならないが、今後の課題として「希望」、『眼の奥の森』との関連性について考察を深めたい。

【参考文献】

尾西康充　2018「《依存》と《隷属》の社会：目取真俊『虹の鳥』論」『近代文学試論』56 号.

栗山雄佑　2017「目取真俊「希望」論―動員される少女の犠牲について」『立命館文学』652号.

佐藤泉　2008「一九九五―二〇〇四の地層　目取真俊「虹の鳥」論」新城郁夫（編）『沖縄・問いを立てる　三撹乱する島ージェンダー的視点』社会評論社.

謝花直美　1996「米兵による暴行事件　人権侵害で男女に“温度差”」『沖縄タイムス』、一九九六年二月七日夕刊二面.

谷口基　2006「不可視の暴力を撃つために―目取真俊「虹の鳥」論」『立教大学日本文学 97』.

銘苅純一　2012「目取真俊『虹の鳥」の異同」『人類生活文化研究』22 号.

付記:『虹の鳥』本文の引用は『虹の鳥』（影書房、2006 年 6 月）による。
本論文は中国人民大学年度科研プロジェクト一般項目「戦後沖縄文学の戦争記述研究」（2019030031）の助成金による研究成果の一部である。

（中国人民大学外国語学部日本語学科講師）